国分・比江　まほろばの里

まほろばの里。歴史の地、「国府」比江。遥い昔に想いをはせながら、のんびりと歴史の宝庫を散策してみましょう。

比江　永源寺の卵塔

国分寺

屋根のふき替えが終った荘厳な金堂、瑞工間近い輝くばかりの光明殿。山門を通り七堂を仰ぎ広い境内の木立の石畳みを行くと、心洗われる思いである。晩秋の国分寺の午後は木漏れ日に静かなたたずまいである。

寺内の書院で、多忙な日程をさいて林広祐住職が会って下さる。国分寺は「寺は国華として好所をえらべ」という聖武天皇の勅命により、僧行基が開山し後、僧空海が中興した。金光明四天王護国寺、または摩尼山宝蔵院と号し、四国霊場第二九番札所で、本尊は行基作の千手観音である。

国分寺　林住職

林住職は静かな口調で広く知られている国分寺の歴史に加えて、知られざる国分寺の秘話も交えて話して下さる。

国分寺は戦国の世兵火にかかり、すたれていた時代もあったが永禄元年(一五五八)長宗我部国親・元親の父子が建立、また承応二年(一六五三)山内家二代藩主忠義が再興した東大寺型の寺院である。古文書によると、ある時、藩の重役からお城のつり鐘が破損したので新しく鋳造するまで国分寺の鐘を差し出せと命じている。かくして創建当時作られた梵鐘は一時大高坂城に移されたこともあった。現在国の重要文化財になっているあの梵鐘である。寺に鐘がなくて淋しければ、城の破小鐘を吊るしておけと付記した文書にはあきれるばかりである。

時代はさかのぼり紀貫之の記した土佐日記に「廿四日。講師馬のはなむけにいでませり」とある。講師とは国分寺の住職のことで、大津の舟戸で出港を待つ貫之のもとへ餞別に来ている。「いでませり」と敬語を使い講師の身分と交友の深さがしのばれる。

住職の話でタイムトンネルの中に居たが、午後五時を告げる鐘の音で我にかえり山門を辞すると西方岡豊城跡の空はタ焼けて歴史民俗資料館のシルエットが印象的であった。

古代の遺産？

古墳時代、履石用として用いられたらしい石の彫刻？縦三㍍三十㌢　横二㍍　厚身三十㌢の巨大なそれには、首がむし、遠い時代を思わせる。

見渡すと、三百六十度の眺望。北の山から南の海、東の三宝山から西の浦戸湾まで一度に見渡せる。この環境にこそ辺りの最大の弥生人勢力者が居たであろうことが想像される。

国分祇園八坂神社、こま犬が和太鼓を抱えていた…かわいらしい。社殿は明治二年改修されたとある。その後記述がないことから、この巨大石もその当時この地に立てられたものと考えられるが、石の材質は外観から、例の比江の廃寺塔の心礎と同じものではないかと思われる。南側、正面三キロには坂折山が有り、何やらひょうたんを横に倒した様な形に見える。又、酒折山（大物主命が、軽の地に酒折の池をつくり、酒を醸造し天皇に献上した…という話）を思いだした。この巨大石の附近にはいつも風が吹く…丘の上だから当然だが。南国平野のどこからでも確認できるうっそうとした杜には美盗之男命が祀られ、古代のロマンがいっぱい……だ。

阿波塚

国府比江地区の丘陵、平曾に河波塚がある。昔は西南に岡豊城を望み、南方指呼の間に国分寺の森をふかんしたであろうが、今は周囲に住宅が建ち並び往時のよすがはない。ただ狭い境内に根を張るえのきと楠の巨木の病葉がおりからの北風に散って遠い戦国の世の悲劇がしのばれる。

阿波塚は岡豊城による長宗我部の軍勢と遠征した阿波軍の激戦に由来する。長宗我部氏がまだ岡豊周辺の小豪族であったころ、北方豊永の豪族ハ笠原左近大夫が阿波の国の軍勢を率いて、岡豊城を攻め落とすべく、比江の桜の畝に陣取った。別名桜平曾といい、のちに阿波塚が作られた地である。当時の岡豊城主、七代目の長宗我部兼光は、これを知って迎え撃ち激戦の末潰走せしめた。戦の跡には阿波軍の遺棄死体が多数散乱していて、村民が死体を集めて埋葬し阿波塚を建立したという。

旧国府村史によると、平曾阿波塚は陰雨の夜など墳墓が鳴動したり、矢響の音や人馬の悲鳴が聞こえるといわれたし、長宗我部氏は祠を建て、下って永禄年間には当時の城主元親が長門の国、瑞雲寺の僧通安に依頼し鎮魂のための法会を行ったという。

四百余年を経た今では、阿波塚の由来を知る人も少ないが、ここに陣取った大将の子孫であろうか、小笠原氏の名を記した立札があり、小さいながら祠は手入れが行き届いている。狭い境内に並んでいる風化した五輪をおろがめば南国市の隠れた歴史のあかしであることが分かる。

（資料提供　乾常美さん）

国衙跡

奈良時代の律令体制下で、国司が各地方の政治を行う場所が国衙で、今でいえば県庁にあたるものである。

八世紀の初めには、比江に国衙が置かれていたようで、以後四百五十年間で、土佐の国司は二百十八人を数える。

国司は、朝廷から派遣され、任期は四年間であった。主な任務は、農民から税を徴収することで、定められた額を朝廷に送っていた。

国司の中で最も名高いのは、歌人でもあった紀貫之で、九百三十年（延長八年）に任命され、約五年間、土佐で過ごした。国衙跡の北西部には貫之の居館跡が公園として保存されている。

任がみちて、京都へ帰り着くまでの紀行文「土佐日記」は、日本最初のかな日記としてあまりにも有名である。

卵塔

比江の永源寺は、とても眺めの良い丘の上にある、山内藩家老一族の菩提寺である。藩祖山内一豊の重臣乾和三一門の巨大な墓所は、永原寺裏手に広がる。初めて見る人には、卵塔とよばれる墓石の大きさに、まず驚きの声をあげることだろう。

中央に和三とその妻通平、右端から数えて第三位が和三の母堂、その左の第六位が三男三蔵の墓で、この四基が始めにつくられたと言われている。五代まで続く大墓（六代以後は小さくなる）は、乾家の隆盛を物語るというのは容易に理解されよう。卵塔という形では、源希義の墓もそうであるが、ここ乾家の大きな墓石は、どこから、どのように運ばれたのだろうか。

「国府史跡のしおり」によれば、「墓碑や燈籠は摂津から船便で運ばれ、大津で水揚げし比江まで大がかりな陸送をしたもので……」とあり、多勢の人夫総動員で、この墓所がつくられたと想像される。百聞より一見、一度この墓所を訪ね藩政時代の権勢をしのんでみてはいかがでしょうか。

日吉神社

比江山南麓、永源寺参道東側の木立の中の古い社が日吉神社である。都を遠く離れて赴任してきた国司たちは、国庁の背後の山を比叡山に見立てて都をしのび、日吉山（後に北江山と改める）と名付け、比叡山から比江山山王権現（祭神は、大山咋命、ご神体は、陰陽石と言われている）を勧請して日吉神社として祀ったとの事。また、社殿の東側には、比江の氏神である熊野神社を合祀してあり、紀貫之の勧請による内日吉の祠もある。西に少し下ると小さな池の中には、厳島神社の社もあって、神社仏閣の密集した地域となっている。

年を経た巨木の茂る境内は、昼なお暗く、梢を渡る風の音のみ凄まじく、きらびやかな王朝の昔をしのぶよすがはないが、国府史跡保存会の方々のご奉仕で境内は整備されており、静寂の中に厳粛な雰囲気がただよっている。

時折、地域の子ども会の遠足ハイキングや肝だめしの場として利用されたり、生活科や歴史学習の場所として子どもたちにも親しまれている。

南国市の味大募集

皆さんは南国市の味といえば何を思い浮かべますか。広報なんこくでは、各地の名産品、四季折々の味、身近なものからみんな知っている名物までおいしいものをはば広く募集し、南国市うまいものマップを作ります。広報委員会では皆様からの情報お待ちしております。（連絡先　〒783南国市大埇2301　市役所企画課広報統計係　☎☎2111まで）